

# はな華



特別養護老人ホーム 清華苑 広報紙

2024年9月15日 第76号  
 発行：社会福祉法人 三幸福社会  
 発行人：総施設長 池田昌弘  
 編集：SEIKAEN Design Lab  
 〒674-0051 明石市大久保町大窪 3104 番 1  
 TEL 078-934-0800 FAX 078-934-0830 <https://seikaen.jp>



京都にある鈴虫寺へ行きました。1年を通して鈴虫の音色を聞くことができる場所から鈴虫寺と言われています。実際の名前は「妙徳山 華嚴寺」と言います。

そこには幸福地藏さんが立っており、右手には錫杖、左手には宝珠を持っており仏様は裸足でおられるのですが唯一わらじをお履きになられています。これはお地藏様が願いを叶えるために一人一人の所へ歩いて来て下さる為に履いていると言われていきます。詳しくは鈴虫寺に行くと言職様の御説法を聞く事ができます。詳しくは御説法で初めて聞く言葉がとても印象に残ったので皆様と共有します。

「みょうじゅたな」ころにあり  
 言葉で聞くと長いですが漢字であらわすと「明珠在掌」と書きます。意味としては自分の手のひらに明るい珠がある。と言う意味でこの「明るい珠」というのが「幸福」ということ。つまり、幸せとは自分の手の中にあるということ。

住職様からは未来のことを考えてしまおうと不安になってしまおうかもしれないけれど、「幸せ」というのは近くにあるものです。そこを見失ってはいけませんよ。と教えて頂きました。

近頃は簡単に色々な情報が手に入る世の中です。他人と比べて自分の幸せを測る傾向もあるようです。「美味しいものを食べた」「沢山寝た」「いいものが買えた」など人によって幸せの形はそれぞれですが、近くにある確かな幸せも大事にしていきたいです。

(介護員 二星木実)

先日、韓国に旅行に行きました。ショッピング、カフェなどの店員さんは韓国語が理解できていない私達にとっても優しく、楽しく旅行が終わりそうだったので、帰りの空港の手荷物検査である出来事がありました。

列に並んでいると保安検査官の若い女性が私たちの2組前の人に対し、目を吊り上げて怒っていました。その時は何で怒っているのだろうと思っていました。

私たちの前の日本人の夫婦に対してもその保安官は怒っており、その日本人の夫婦は否がないにも関わらず「すみません」と謝りながらゲートを通過していきました。

さて、私達の番です。バッグやジャケットをカゴの中に入れ、あとはゲートを通過するだけだったので、その保安検査官はポケットの中にも入っていないか、パスポートはカゴに置けと言葉は出さず、ジェスチャーで指示してきました。

ポケットには何も入っていないとこちらもジェスチャーで返しましたが、何度もポケットの方を指差し、私達に対しても目を吊り上げて怒ってきました。

旅の最後に悶々としてしまいましたが、今度同じようなことがあれば相手の気持ちを汲み取ることやオーバーアクションを心がけようと思いました。

表現方法が相手に伝わらないと何の意味もありません。相手に伝わる伝え方、介護の仕事と通ずるものがあり日々の自分の仕事を振り返る機会になりました。



(介護チーフ 米田美紀)

私は部屋の模様替えの為にロムに挑戦してみました。以前までは物の配置のみを変えて部屋の模様替えをしていたのですが、部屋全体の雰囲気を変えたかったので、壁の雰囲気を変えようと考えました。

調べていると、実際の木を使ったウッドパネルという物があったので、購入しました。ウッドパネルを片側の壁一面に貼り、サイズが合わない時はパネルをカットして貼り付けました。パネルのカットはノコギリでカットしなければいけなく、大変ではありましたが、部屋の雰囲気が変わっていくことで、大変な作業も楽しかったです。

他にも観葉植物を買い、満足のいく部屋になりました。少し物の配置を変えたりすることで部屋の雰囲気が変わるので、何か気分転換がしたいと思った時は、部屋の模様替えを試みてはいかがでしょうか。

(介護員 上本健)



## 編集後記

今回の「はな華」はBCP(業務継続計画)や、新たに相談員となった職員への想い、委員会の活動報告など掲載しました。

今後も皆様に楽しんで頂けるような「はな華」を発行して参りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

(生活相談員 原田七海)



## 日頃の備えを万全に

生活相談員 北野里奈

近年、大雨や台風などの気象災害、地震などの自然災害が日本各地で発生しています。皆様の記憶に新しいかと感じます。「自宅や職場、地域などのコミュニティの備えはどのようでしょうか。」

自然災害時におけるBCP (Business Continuity Plan) について、ご説明させていただきます。BCPとは、業務継続計画とも言われており、大震災等の自然災害、感染症のまん延などが発生しても、重要な事業を中断させない、または中断しても可能な限り短時間で復旧させるための計画の事をいいます。つまり、「緊急時にも事業を途切れずに継続すること。」が必要とされています。

現在、特別養護老人ホーム等の入所施設においては、BCPの策定と運用のための研修や訓練が義務付け(2024年4月より)となっています。背景には、大規模な自然災害の頻発と、感染症等のパンデミックの影響があり、多くの介護施設において利用者や職員健康と安全が著しく脅かされました。

また、特養などの高齢者施設では、お一人では避難が難しい方が多く入居されています。特に夜間帯は職員人数が少なく、避難計画や備蓄の確保などの日頃の「備え」が非常に重要とされています。清華苑については、河川や海抜、土地の特徴をみると大きな被害が想定されている地域ではありません。そのため、有事の際は別の場所に避難することより、

いわゆる籠城型と呼ばれる、いかに蓄え備えるかが重視される特徴があります。

また介護サービスを継続するには、必要な資源(職員、建物や設備、電気・ガス・水道などのライフライン)を守る事が重要となります。有事の際には、まずは避難誘導・安否確認などの災害業務に対応します。

そして重要業務を優先して取り組むことが大切です。つまり、食事や排せつ等の生命維持に必要な業務を最優先とし、その他は休止または縮小とする考え方です。

特別養護老人ホーム清華苑では、2022年9月にBCPを作成し、今年の7月5日にBCP訓練を実施しました。内容は、備蓄食を用いて主に介護員が利用者へ提供する食事の準備を行うものです。この訓練で導き出された課題や、気付きを活かし今後も継続して訓練を実施していく予定です。

計画の作成だけでは意味を成し得ません。有事の際に活用できる内容に日々見直しを行うこと、そして訓練や研修を実施し経験と知識を積み重ねていくことが非常に大切です。専門家による助言や、勉強会、そして何より皆様の知恵と工夫を含めたお力をお借りしながら、生活の場という責務を果たすべく取り組んで参りたいと思います。引き続きご協力ご理解をよろしくお願いいたします。



## 自分らしい最期を迎える

### 介護チーフ 川口琴音

私は清華苑に入職し、ターミナル委員会に所属して、自分なりの死生観が生まれました。仕事だけでなく、自分や両親、祖母の最期についても考えるようになりました。私は、小さいころから祖母と一緒に住んでおり、母は働きに出ていた為、祖母が母親のような存在でした。

昨年の8月、祖母の容体が急変し、最期の1週間を家族総出で介護をしました。清拭や、洗髪、夜も体位交換、オムツ交換をしながら、心を込めてお別れの準備をする事ができました。

プライベートな話しになりましたが、私が所属するターミナル委員会では月に1回、多職種で集まり、看取り期に入ったご利用者のターミナルケアの方法などを話し合います。そして、施設で看取りをさせていただいた全てのご利用者の振り返りも行います。

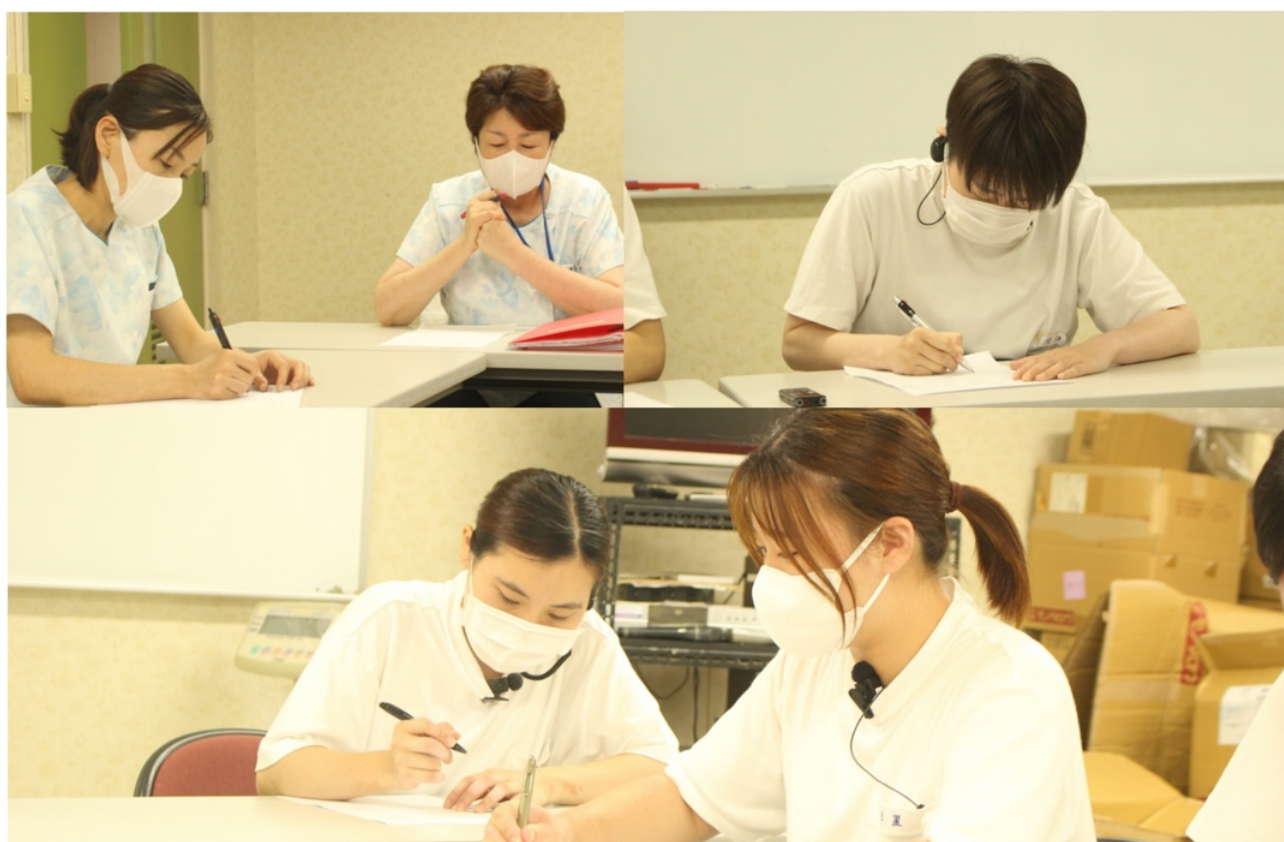
ターミナルケアを行うためにはご利用者の日頃からの様子を把握しておく必要があります。心身の状況ももちろんですが、趣味や趣向も把握することで、より個性のあるケアを検討することができます。

日頃のご利用者とのお話の中でヒントがある場合や、行動から知れる情報もあります。そのため、施設内で行うターミナルケアの研究では、新人スタッフに対し、介助時だけで

なく、ご利用者との日頃のコミュニケーションから情報逃さないように伝えていきます。

この他、施設外での活動としては、大学で看取りについての講義やターミナルケアの事例発表など行っています。

それぞれご利用者ご家族、様々な生活歴や背景があります。ご利用者が自分らしい最期を迎える事が出来るよう私たちスタッフは最善の看取りを行って参ります。





エピソードに掲載されているご利用者と写真に映られているご利用者は別の方で関係はありません。



## 大切なひととき

介護員 津田智行

普段のご利用者とは「す何気ない日常の中にも、大切な瞬間がたくさんあります。おやつ時間のエピソードをお話しします。」  
「ご利用者のS様は私のケース担当です。初めてS様と接した時は、まだお互いに十分な信頼関係が築けていない状態でした。S様もどこか距離を置かれているように感じられ、心を開いていただくには時間が必要だと感じました。しかし、日々のちょっとした会話を通じて、少しずつS様の心が開いていくのを感じることができました。」  
ある日、私はおやつ準備を進めていました。その時、「ご利用者のS様がこやかに近づいてこられ、今日はごら焼きか、かっぱえびせんある？」と尋ねられました。  
S様にとって、おやつ時間は特別な楽しみのひとつです。その期待に応えるため、私は心を込めて「ちゃんど」用意していますよ」とお伝えし、丁寧におやつをご提供いたしました。

S様は満足そうに頷きながら、ごら焼きをひと口召し上がり、「やっぱり、かっぱえびせんが一番好きね」と微笑まれました。  
その言葉に、私は心からの安堵を覚え、このような何気ない日常の中でのコミュニケーションが、ご利用者と職員の良い関係を築く上でとても重要になります。  
このようにして、S様が当苑での時間を少しずつでも居心地の良いものを感じていただけたようになってきたことは、私にとって大きな喜びに感じました。  
S様がどのような瞬間にも安心感を持って過ごせることが、私のケアに対する使命であり、目標でもあります。  
日常の中でのコミュニケーションの積み重ねが、S様にとって安心して過ごせる場所となるよう、これからも生活支援を続けていきます。

# STAFF VOICE

## スタッフボイス

### 特別養護老人ホーム 清華苑

介護、看護、相談、調理、事務、それぞれの部署で働くスタッフの生の声をご紹介します。



## 新たなスタート

生活相談員 船曳来未

介護員として約1年経験を積み、今年の7月より生活相談員として勤務させて頂いています。介護現場との違いによる戸惑いもありますが、現場での経験を新たな形で還元できる機会を頂けたことに感謝しながら日々を過ごしております。

介護員時代からご利用者との日々の関わりが楽しみの一つでした。嬉しいことがあった時も悩みがある時もご利用者の部屋に向向いては沢山話を聞いて頂きました。  
皆さま我が子のことのように一緒に喜び、励まして下さり、時には目から鱗が落ちるような考えを教えてくださいます。

高齢者の方々と触れ合いは普段付き合う友人とは全く異なる話や価値観、自分が知らなかった世界を知れるようで興味深い面があり、話をする中で様々な知恵や知識を得ることができ、自分の人生観に新たな価値観が得られる貴重な経験だと思います。

職員として必要な支援を提供するだけでなく、関わりの中で、年齢という壁を超えて同じ経験を分かち合える環境を構築できることが、高齢者福祉ならではの魅力ではないでしょうか。

介護サービスを利用する方々には、個々に身体的苦痛や心理的負担、経済的苦慮があると思います。その個々の抱える問題を凝視しつつ、ご利用者の方はもちろん、ご家族の方にも安心と信頼をして頂けるような職員になりたいと思います。その為にまずは、目の前の方との関わり一つ一つを大切に、丁寧な支援を心掛けていきたいと思えます。

私の関わりが、誰かの笑顔の源になり、幸せを感じて頂けることが出来れば、私にとって、これ以上の喜びはありません。「ご利用者の方々はご家族やご親族にとってのかけがいのない存在であることを忘れず、人生の最期に携わる中で、よりよい毎日が送れるよう、ご利用者やご家族と一緒に考えてもらえる相談員を目指して精進して参ります。